

串本海中公園 マリンパビリオン

2005. 1

Vol. 34, No. 1



ヘライワツタ

Caulerpa brachypus

体は匍匐枝と呼ばれる海底を這う蔓状部分と、それから立ち上がる直立枝と呼ばれる葉状部分とからなる。匍匐枝は円柱状で直径は2～4 mm、所々から糸状の根を出し、海底の岩や小石、砂などにつく。直立枝はやや肉厚・扁平で、細長い帯状か舌状、和名は葉がヘラ状になることによる。葉の縁は波打ち、時にノコギリ状の刻みを持つ。葉状部の長さは普通3～5 cm、幅5 mm位であるが、生息条件によっては長さ7 cm前後になり、葉形も普通単状であるが、成長に伴って表面や縁から新しい枝を出すことがある。色はやや白みがかった緑色。イワツタの中では温帯にまで分布をのびた種で、日本では太平洋沿岸中南部、四国、九州・南西諸島に広く分布する。串本では水深10 m位までの浅い海底に多く生育し、外海に面したタイドプール、岸壁の壁面などで密で大きな群落を見ることが多い。写真は串本町田子沖の水深8 m程の岩礁底で撮影したもの。イワツタ目。

S.U.

串本海中公園センター

POLYCHAETOLOGICA (33)

各科の属の検索と種の説明 (18)

サシバゴカイ科 No. 17 内田 紘臣

前回は3対の触手鬚を持つ属であった。今回からは最後に残った2対の触手鬚の属である。

属 *Eteone* Savigny, 1818

サシバゴカイ科の属としては *Phyllodoce* Savigny, 1818, *Eulalia* Savigny, 1818 両属と共に最も古く記載された属である。上記両属が4対の触手鬚をもつのにに対し、本属はこれらに近いが、2対のみの触手鬚をもつものとされた。

Savigny はロゼッタストーンの発見でも有名な、かのナポレオンのエジプト遠征の報告書 "Description de l'Égypte" の環形動物の項を執筆し、ここで彼は環形動物の新分類体系の提唱と全属のレビューを行い、その中で当時北欧から知られていた *Nereis flava* Fabricius, 1780 のために本属を創った。

本属の特徴は第1体節にのみ背腹2対の触手鬚があることである。口吻表面は前端部以外は全く平滑で、いかなる微少な突起もない。亜属とされる *Eteone* (*Hypereteone*) Bergström, 1914 では口吻表面に大きなイボが数縦列をなす。これは属を分けるのに十分な形質と見なし、属の検索表 (Vol. 30: 4 の検索表 No. 3) とは違って、ここでは *Hypereteone* を別属として扱う。

属の模式種は上に記した通り、*Nereis flava* Fabricius, 1780 である。本種は Otton Fabricius の有名な "Fauna Groenlandica" 中に新種記載されたグリーンランド産の種である。なお本書の次ページには現在同属とされるホソミサシバ *Nereis longa* Fabricius の新種記載がある。

Eteone は「薄い・細い」の意 *tenuo* のフランス語化に由来するものと思われる。それまでに知られていた種に比べて本属の種は小さく細い。

本属には属が確定的ではない種を含めて、約30種があり、わが国からは *E. longa* ただ1種が知られている。もう1種、*Eteone japonensis*

McIntosh, 1901 が知られるが、別属の種である。

筆者の手元には、2種があり、他1種は那智勝浦町那智湾において採泥器で採集された非常に細い1個体の標本で、エルサルバドルのマングローブの干潟から報告された *E. aestuarina* Hartmann-Schröder, 1959 によく似る種である。

属 *Eteone longa* (Fabricius, 1780)

ホソミサシバ (今島, 1965)

本属の多くの種と同じように、第2体節の背触鬚を欠く。以後の疣足の背触鬚は丸みの強い三角形か、楕円形で、幅より長さがわずかに勝り、前口葉は幅より長さが勝るが、口吻を翻出させた標本では、前口葉が短くなり、長さより幅が勝る。

筆者の標本の生時の色彩の記録はないが、模式産地付近での本種は生時、淡黄白色半透明という。模式産地は前述のように、グリーンランドで、北半球の北極圏から寒帯にかけて広く分布する。学名は Savigny (1818) によって、前述の *Nereis longa* から、上記の学名にされた。わが国では、北海道渡島半島が初記録 (Imajima et Hartman, 1964) で、神奈川県三浦半島からも知られている。

筆者の手元には北海道忍路、潮間帯産の1個体の標本がある。この標本は背面に3本の暗色縦帯があり、中央の帯はすこぶる幅広く、両側の帯は細い。属の検索 No. 3 左図 (Vol. 30: 40) はこの標本からのものである。

属 *Hypereteone* Bergström, 1914

基本的に属 *Eteone* に同じである。*Eteone* の模式種、あるいは大部分の種は第2体節に背触鬚を欠く。しかし全ての種は第2体節に疣足と、その上に剛毛をもつ。またさらにその腹方に腹触鬚をもつ。しかし「ノルウェー産海産環形動物」の中で Malmgren (1865) が記載した *Eteone pusilla* Oested, 1843 は第2体節に背触鬚を欠くばかりか、そこにあるべき疣足もその上の剛毛をも欠き、そこには腹触鬚のみがある。ところがよく調べてみると、この Malmgren (1865) の記載した種は原記載の Oersted (1843) の種

とは違い、原記載の種は第2体節に疣足と剛毛をもっていた。サシバゴカイ科のレビューで Bergström (1914) は上記 Malmgren (1865) の種が既に Claparède (1868) によって、ナポリから *Eteone lactea* という新種で記載されていることを突き止め、この第2体節の特異な形質は属を分けるに値すると考えて、*Hypereteone* なる新属を創り、上記の種をその模式種とした。属名は *hyper-eteone* で、前半部は「超・スーパー」の意である。本属には属模式種の *Hypereteone lactea* (Claparède, 1868) ただ1種を含めた。なお Bergström (1914) は模式種の口吻は滑らかと記している。その後第2体節の疣足の形状のみでは別属にするに十分な形質ではないとする人が多く、以後本属は *Eteone* の亜属として扱われることが多かった。

本属には2種が知られていた。他の1種はフランスの英仏海峡海域から記載された *Hy. foliosa* Quatrefages, 1865 である。本種は口吻に6縦列の大きな突起が並ぶ。古くからこの両種は同種ではないかと討論されてきたが、最近シノニムであることが明らかとなった。そこで、現在では本属には模式種ただ1種が属し、本種はより古い学名を取って、*Hypereteone foliosa* Quatrefages, 1865 ということになる。

本属は *Eteone* と同様であるが、第2体節に背触鬚と疣足およびその上の剛毛を欠く。さらに口吻は6縦列の疣状突起を持つ。

検索表 (Vol. 30: 40) に抜けた事情は、属の原記載における模式種の「口吻は滑らかである」という記載の存在と、ただ1個体しかない標本を切開して口吻を調べる作業を延ばしていたので、検索表に間に合わなかったためである。

Hypereteone ornata (Grube, 1878)

本属には模式種の *Hy. foliosa* ただ1種がある。ところが南アフリカから Day (1957・1967) が報告した *Eteone ornata* は正しく本属の種である。しかし模式種すなわち *Hy. foliosa* では、南アフリカの個体で見られた背面の色班がなく、Day はこの色班と全く同一のパターンであ

る *Eteone ornata* と同定した。

本種は北部日本海でポーランドの Dybowski が採集した標本によって *Eteone ornata* として新種記載されたものであり、Fauvel (1932) によって亜属 *Eteone* (*Mysta*) の種とされた。種の学名は「飾りのある・きれいな」の意である。各節背面の紫色の3色点が名の由来である。

本種を原記載以後に初めて記録した Fauvel (1932) の標本はインドのものであり、彼はここで「フィリピンから記載された *Mysta maculata* Treadwell, 1920 は本種に近く、両者は同種の可能性がきわめて高い」とコメントした。これが行き違いのはじめで、それ以後 *Eteone ornata* は *Mysta maculata* に近い種であるとの認識が広まった。

原記載以後、本種は極東の日本海と、その北方からの記録の他に、インドや南部アフリカ・黄海・インドシナなどから報告されているが、南アフリカの記録のみは明らかに属 *Eteone* ではなく、本属の種である。しかも、Grube (1878) の原記載の色彩に全く一致する。しかし原記載には第2体節疣足の形状や、口吻の形状についての記述は一切ないのである。

一方、模式産地の日本海を中心に極東海域から、*Mysta maculata* によく似た種がロシアの学者によって *E. (Mysta) ornata* としてしばしば報告された。しかしこの種の背面の模様は色点ではなくて、明らかな矩形の色域で、これが前後に連なって縦帯をなすものである。それを明瞭に表す図が Uschakov (1972) のサシバゴカイ類のレビュー中に示されている。

この両者の二つの異なった見解で、筆者は Day の見方が明らかに正しいと見る。

筆者の標本は各節背面両側には暗褐色の斑点が並ぶが背面正中には3節ごとの飛び飛びにしか斑点がない。その他の形態は模式種の欧州産の種の記載によく合う。

筆者の手元の標本は那智湾水深 3.7 m の砂底から得られた体長 45 mm 体幅 1.5 mm の1個体である。属の検索表 1 と 2 の左図 (Vol. 30: 40) はこの標本からのものである。

2004年 鯖浦定置観測結果

小寺 昌彦

鯖浦地先で行っている定置観測の2004年の結果を報告する。昨年は10月20日に台風23号によって海中展望塔の連絡橋が破壊され、それ以降展望塔での観測ができなくなった。このため11月からの観測は水温などを展望塔手前にある海中観光船乗り場の桟橋の外側から、水中透視度は港内に停泊した海中観光船の中から行った。なお、平年値は1974年から2003年までの30年間の平均値を用いた。

《気温》

5～12月の気温は平年値並から2℃以上高く、7月には月間平均値の過去最高値27.9℃を記録した（これまでは1977年の27.4℃）。気温が低い月は少なく、1月が平年値より2.1℃、3月が1.4℃低かっただけである。年平均値は18.0℃で、対平年値は+0.3℃、対前年値は+1.1℃と暖かった。年最高値は31.8℃（7月20日）、年最低値は-0.1℃（1月22日）であった。

《水温》

水温に関しては相変わらずの高目傾向が続き、月平均水温が平年値を下回ったのは8、11、12月の3ヶ月だけであった。年平均水温は21.9℃で、対平年値は+0.7℃。これは前年より0.2℃低い、これまでで4番目の高い値となった。特に4月と6月の平均水温はこれまで30年で最高の記録となった。年最高値は28.5℃（7月10日）、年最低値は15.8℃（1月27日、2月8日）であった。

《塩分濃度》

年最高値は36.5‰（4月18日）、年最低値は31.6‰（10月10日）であった。10～12月は平年値より低く、台風などの大雨による影響が出ている。しかし、それ以外は高い値で推移したために、年平均値は35.0‰となり、平年値と同値であった。

《降水量》

年間総降水量は2322.7mmで、これは対平年値+34.3mm。前年と比べると+353.1mmであり、

前年の多雨から一転し、平年的な雨量となった。平年値を大きく上回った月は、10月と12月で、特に12月は平年の3倍近い雨量となった。逆に少なかったのは1月と4月で平年値の3分の1以下であった。

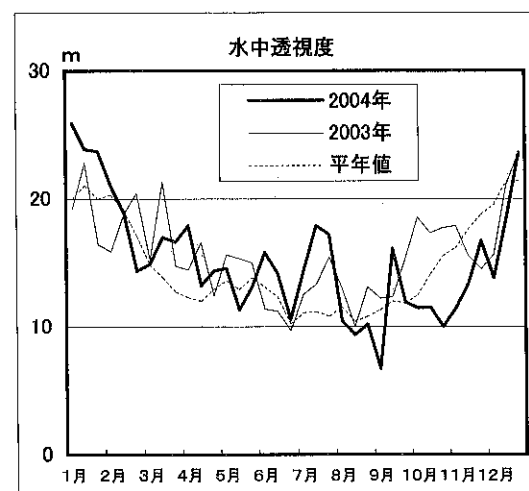
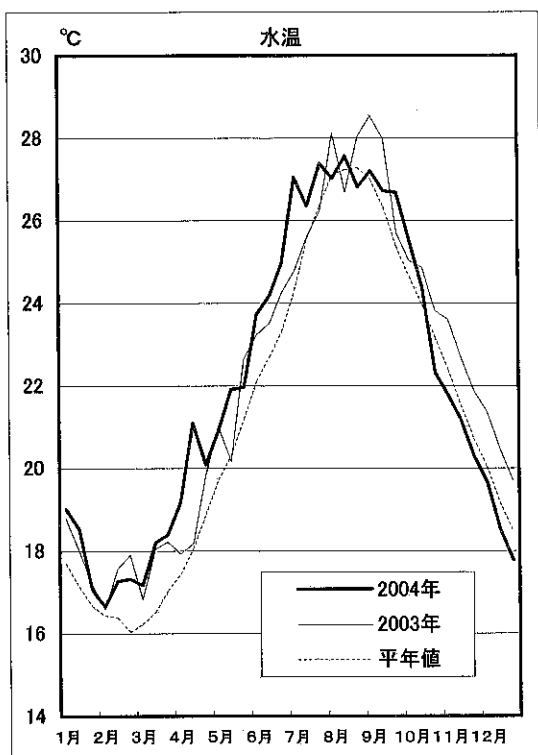
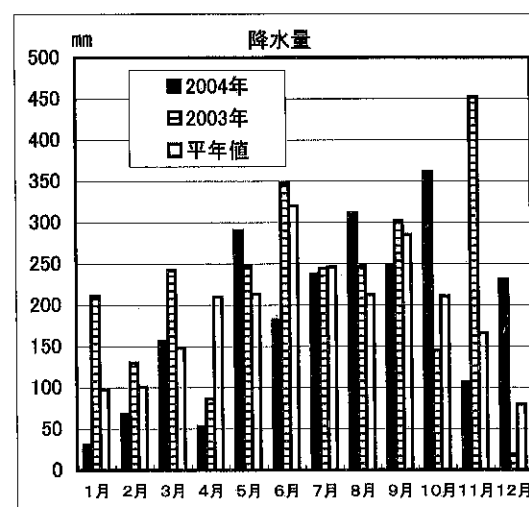
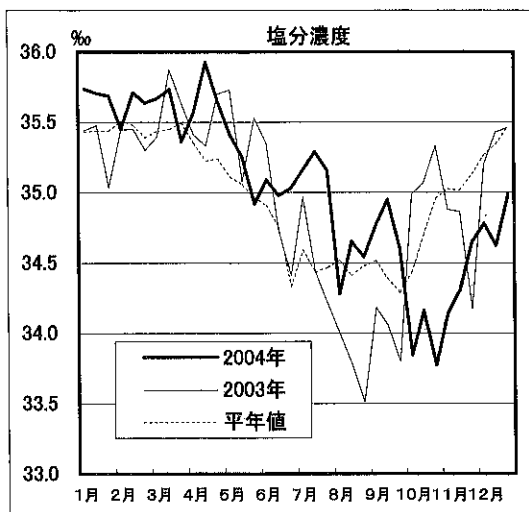
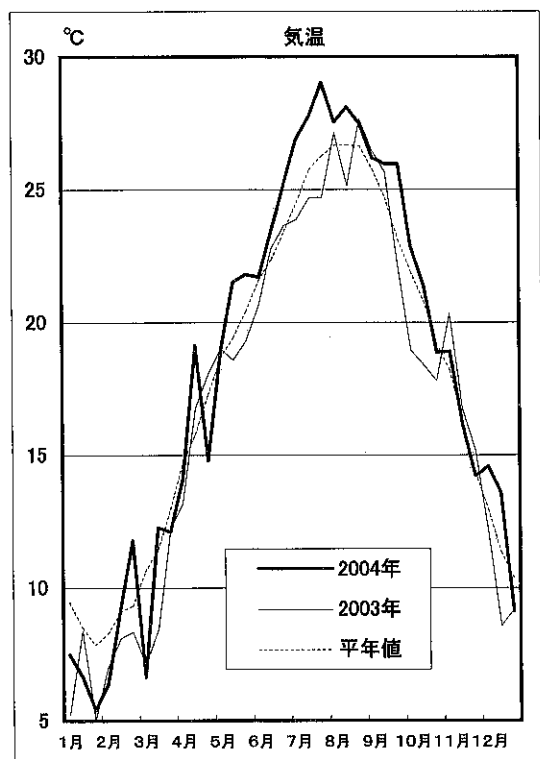
《透視度》

年平均値は15.5mで、対平年値は+0.7m、対前年値は-0.2mであった。最高値は1月4、6日の30m。7月は平年値より5.5m、また1月は4.1m高かったが、10月以降は台風や多雨の影響で平年値を3m近く下回った。11月以降は大きく荒れた日はほとんどなかったが、濁りの強い日が続いた。これは観測場所が港の内側であることも考えられるが、この時期に潮岬沿岸のダイビングポイントでも透視度10m程度の悪い状態が続いており、観測場所の変更による影響は大きくないかもしれない。

《まとめ》

2004年は全国的に台風の被害が大きく報じられた年であったが、当館地先も例外ではなく、初めに述べたように展望塔への連絡橋が壊されるという被害を受けた。被害は橋だけでなく、浅いところではサンゴや海底の景観も一変したところが多い。そのためか、これまで地先の浅海域ではもっとも普通に見られた魚のひとつ、クロホシイシモチが激減しており、大きな群れを見ることがなくなった。他にも気がつかないところで異変があったのかもしれないが、展望塔での観察ができなくなった関係でそれ以上の観察はまだ十分にできていない。

水温の高め傾向もそろそろ終わりに近づいたのか、10月20日に台風23号が通り過ぎた後急激な水温低下が見られ、それ以降低い値で推移した。海上保安庁海洋情報部の海洋速報によると8月ごろから黒潮が紀伊半島から離れ、流軸は潮岬の南100マイル辺りを通っている（前年はほとんど20マイル以内）。11、12月の水温が平年値を下回ったことはこの黒潮離岸のためと予想され、本年2、3月の低水温期に水温がどう変化し、その影響が周辺生物にどう現れてくるのか、非常に気になるところである。



**特別展「もう一つの熊野古道
大辺路をゆく」を開催
報告 宇井 晋介**

串本海中公園では過去様々な特別展を企画・開催してきたが、今回の特別展は最も毛色の変った特別展のひとつだろう。昨年7月、紀伊半島の高野山と那智大社を初めとする熊野三山を巡る広いエリアが、「紀伊山地の霊場と参詣道」として、ユネスコの世界文化遺産に登録された。今回の特別展はそれを記念してのものである、と言っても、海の生き物を展示する当館に熊野古道に関する文物や資料などあるわけもなく、取り組みを一から考える必要があった。結果、海中公園の特色を生かして、海からの視点で古道を見直すというコンセプトをとることとなり、この古道沿いに残る民話などに登場する海の生き物をメインに、古道にまつわる様々な海の話題を柱として展示することに決定した。しかも、幾つもある古道の中から、この海中公園の敷地内にも往時の道標がある大辺路（おおへち）と呼ばれる海岸沿いのコースに沿って企画を進めることとなった。

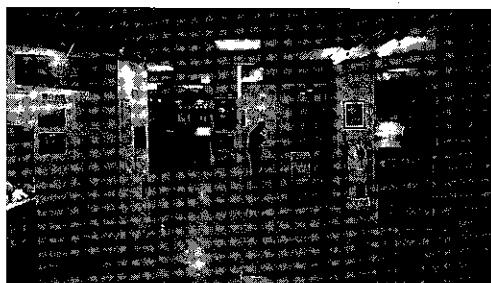
今回の展示の柱は5つある。一つはこの大辺路沿いに残る民話とそれに関する生物・文物である。海沿いだけあって海に関する多くの民話が残されているが、その中から6つを選び展示した。選んだのは「ショウジョウの釣り場」「オオナ伝説」「クジラのお礼」「灘兵衛苦肉のサメ釣り」「目ナシ鯛」「悲恋の皇后」で、展示内容を1つ挙げると、例えば「オオナ伝説」では、弘法大師（空海）が昔、親切のお礼に大魚の存在を漁師に教えたという民話から材題をとり、地元でオオナと呼ばれるオオクチイシナギの生魚、地元に残る弘法大師を祭るお堂や立像のパネル、その他の弘法大師にまつわる地元の民話を紹介した。

もう一つの柱は「大辺路のトリビア」と題し、街道沿いに残る面白い話、興味深い話を紹介した。展示内容は「神の使いヤタガラス」「山伏とテング」「秋刀魚苦いかしょっぱいか」「ふ

だらく渡海伝説」「不老不死の薬を求めて」で、ここでは例えば「ふだらく渡海伝説」の内容はこうである。補陀洛山寺（ふだらくさんじ）は那智に現存する寺であるが、この寺では平安～江戸時代にかけて「ふだらく渡海」という珍しい行事が約千年もの間行われていた。「ふだらく渡海」とはある年齢に達した僧が小舟に乗り、遙か西方にあるという観音浄土「補陀洛」を目指すと言う究極の捨て身行で、僧が乗る小船の部屋は外から釘付けされるという今から考えれば残酷極まりない行事である。この僧の中には逃げ出すものもいたが、捕まって殺されたという故事から、この辺りではその僧が恐ろしいクロシビカマスに姿を変えたと伝えられている。展示はこれらの船や寺の写真パネルとクロシビカマスの展示を組み合わせである。残念ながら最初は生きたクロシビカマスの展示を目指したのだが、採集がうまくいかず、標本の展示となっている。しかしお客さんにはその珍しい話とともに人気があるようだ。

その他、大辺路街道を全てオリジナルの写真とパネルで紹介した「大辺路街道てくてくマップ」、熊野の魚を描き続けている福井正二郎氏の原画展「福井正二郎原画ギャラリー」、この街道筋の昔と今の写真を比較した「大辺路今昔写真館」と色々和趣向を変えて展示を行っており、子供から大人まで楽しめる企画となっている。現役の山伏である那智山青岸渡寺の副住職が現在も修行に使っている法螺貝も見ものである。会期は今年5月8日まで。

最後になったが、今回オオクチイシナギを快く提供していただいた横浜八景島アクアミュージアムをはじめ、お世話になった皆様にこの場を借りて深くお礼申し上げる。



Vol. 33 総目次

Vol. 33, No. 1

表紙 ベニモズク	… 1
イシサンゴ類の産卵について	
-2003 年の観察結果-	御前 洋… 2
串本のサンゴ群集 (13)	
串本沿岸のサンゴ概況②上浦～稲村崎	野村 恵一… 4
2003 年鯖浦定置観測結果	小寺 昌彦… 6
鯖浦の海から	宇井 晋介… 8

Vol. 33, No. 2

表紙 チャシオグサ	… 9
続 鯖浦で見られる大型褐藻類の減少	
棘皮動物との関係	宇井 晋介… 10
サンゴ水槽の異変 前編	森 美枝… 11
海中展望塔に集まる魚 (27)	
2003 年 1 月～12 月	小寺 昌彦… 12
POLICHAETOLOGICA (28)	
各科の属の検索と種の説明 (13)	
サシバゴカイ科 No. 12	内田 紘臣… 14
鯖浦の海から	宇井 晋介… 16

Vol. 33, No. 3

表紙 イトゲノマユハキ	… 17
サンゴ水槽の異変 後編	森 美枝… 18
サンゴ食巻き貝の駆除について	御前 洋… 20
POLICHAETOLOGICA (29)	
各科の属の検索と種の説明 (14)	
サシバゴカイ科 No. 13	内田 紘臣… 22
鯖浦の海から	宇井 晋介… 24

Vol. 33, No. 4

表紙 カジメ	… 25
鯖浦地先で採集された魚種 (1)	
ベラ科 6 種	小寺 昌彦… 26
POLICHAETOLOGICA (30)	
各科の属の検索と種の説明 (15)	
サシバゴカイ科 No. 14	内田 紘臣… 28

ジョロモクとアカモクの謎	宇井 晋介… 30
海のうわさ話 (その 7)	

当館横の岩礁海岸に上陸したウミガメから

宮脇 逸朗… 31

鯖浦の海から	宇井 晋介… 32
--------	-----------

Vol. 33, No. 5

表紙 タマイタダキ	… 33
定置網で捕獲された魚種について (9)	
2002 年、2003 年の結果	御前 洋… 34
POLICHAETOLOGICA (31)	
各科の属の検索と種の説明 (16)	
サシバゴカイ科 No. 15	内田 紘臣… 36
実習生思考	… 38
第 31 回マリンスクール開催	… 39
鯖浦の海から	宇井 晋介… 40

Vol. 33, No. 6

表紙 ガラガラ	… 41
串本でオニヒトデの大発生始まる	
	野村 恵一… 42
鯖浦地先で採集された魚種 (2)	
スズメダイ科 6 種	小寺 昌彦… 44
POLICHAETOLOGICA (32)	
各科の属の検索と種の説明 (17)	
サシバゴカイ科 No. 16	内田 紘臣… 46
鯖浦の海から	宇井 晋介… 48

前号 (Vol. 33, No. 6) で掲載予定であった総目次が都合により本号掲載となりました。

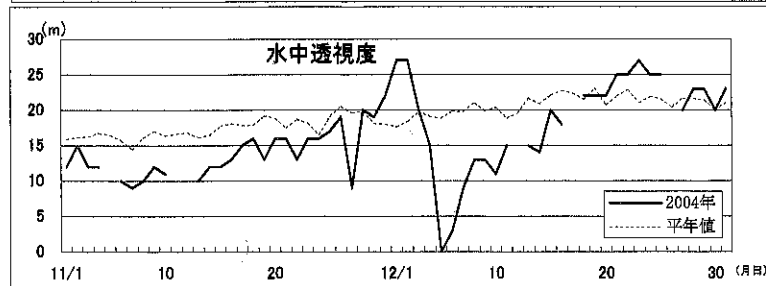
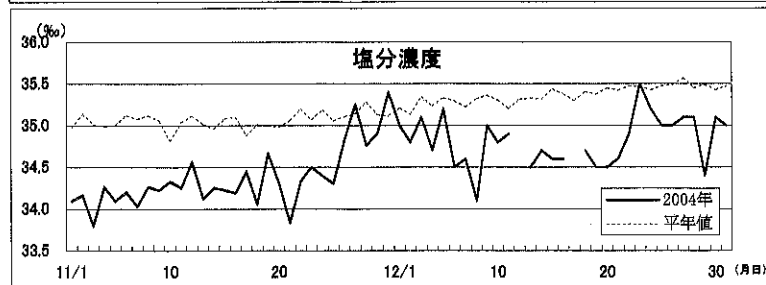
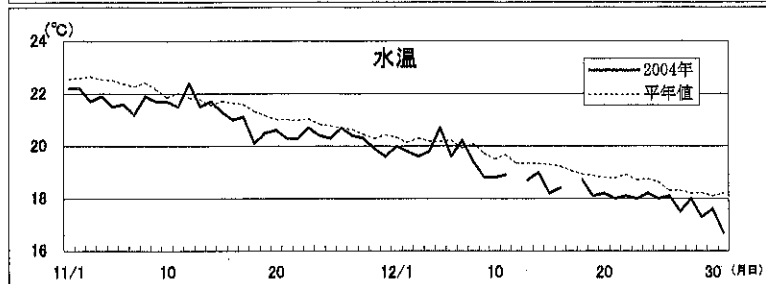
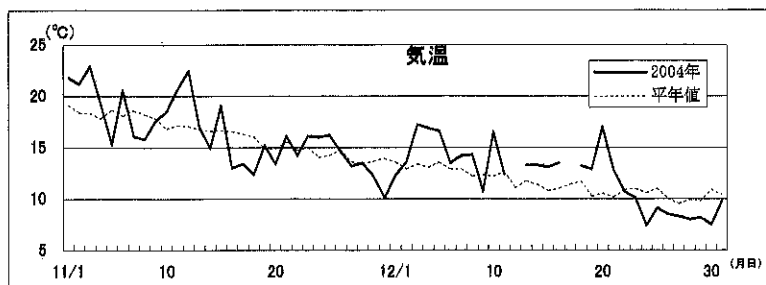
メールアドレスの変更について

年間購読やバックナンバー購入などの問い合わせ先メールアドレスが変更になりました。ホームページでも告示しておりますが、今後は以下のアドレスのマリンパピリオン編集部にお問い合わせをお願いいたします。

kmpcsabiura44@almond.ocn.ne.jp

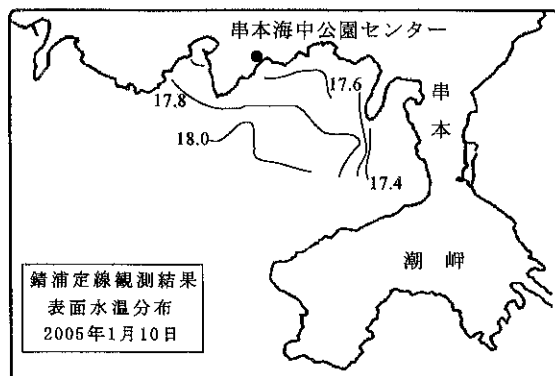
鯖浦の海から
宇井 晋介

平均値	11月	気温16.4℃	水温21.1℃	塩分濃度34.4‰	水中透視度14.0m
	12月	気温12.2℃	水温18.6℃	塩分濃度34.8‰	水中透視度18.6m



注) 今号の観測結果に関しては本文を参照のこと

最近では世界中から途切れることなく天変地異のニュースが入るものだから、つい話題がそちらの方に行ってしまう。そんな中スマトラで起きた地震と津波は、我々が映像で見た最も新しく生々しい貴重な映像となった。この欄でも津波の話題はこれまでに随分と取りあげてきたが、これほどまでに、リアルにその状況を見せられると、これまでの認識がいかに甘かったかをイヤというほど思い知らされる。あの凄まじい波の圧力にもし海岸にいる時、あるいは潜水している時に遭遇したら、果たして生きて帰れるだろうか。答えは 99 % 否。全ては運次第、そんな確信さえある。しかし、そう思いながらも普段の生活はこれまでと変わらず、別段海が怖くなった訳でもない。ただ確かなのは、今回被災した全ての人が、こうした普段と変わらない「日常」から突如「異常」な世界へ一瞬にして放り込まれてしまったということだけである。心配ばかりしていても始まらないが、何げない「日常」のすぐ隣に想像を絶する危険が常に存在する事だけは肝に銘じておかねばならない。



マリンパピリオン Vol.34, No.1 通巻379号

年 6 回発行 一部100円
(年間購読料1,000円/送料含む)
発行日 平成17年1月31日

編集兼発行人

〒649-3514 和歌山県西牟婁郡串本町有田1157
(株) 串本海中公園センター
電話 & FAX 0735-62-4875
ホームページ <http://www.kushimoto.co.jp/>
印刷所 坂本印刷